



## 十 束の間の別れにて

---

「坂本殿。長い間、お世話になったでござる」

突然、宮本が玄関先で正座をして頭を下げた。

「えっ。どういうこと？」

坂本は今、会社から帰って来たばかりで、玄関で靴を脱ごうとしていたところであった。宮本が佐々木を倒したことで、坂本と宮本による婚活プロジェクト妨害事件の疑いも晴れ、今まで通り、坂本はタウン雑誌の会社で働いていた。ただし、会社による婚活プロジェクトは中止となった。結婚して子どもを増やすよりも、都会から若者や退職者等を誘致する、Iターン、Uターン、Jターンの方が手っとり早く人口を増やせる、成果が上がるとして、新たな試み、そう、世の中を洗濯する方法として、若者・年寄移住・定住プロジェクトを行政と協力して取り組もうとしていた。

「そろそろ、時間が来たようござる」

「時間って？」

宮本は坂本のただならぬ様子に、靴も脱がずに玄関に立ち尽くしたままだ。

「ここでは何だから、取りあえず部屋で話そうよ」

「そうござるな」

と、言うものの、坂本の部屋は1LDK。玄関で靴を脱いだ先がすぐに部屋だ。その先はベランダで、それを乗り越えると隣のマンションの玄関に到達する。ベッドに腰掛ける坂本。その前に正座する宮本。その様子を見て、坂本も慌ててベッドから下り、宮本の前で同じように正座をする。部屋が狭いため、向かい合うと膝と膝がくっつきそうだ。

「さっきの続きだけど、時間がどうかしたの？それよりも先に、一杯飲もうよ」

坂本は宮本がいつものようにピンクの前掛けをせず、深刻そうなので、雰囲気のを和らげようと冷蔵庫にビールを取りに行った。そして、宮本に一本を手渡すと、自分はプルブタを開け、ぐいとひと口飲む。そして、仕事の疲れとこれから宮本の話しに付き合うため、「はあ」と一息ついた。

「それで・・・」坂本は宮本に向き合った。既に、宮本は缶ビールを飲み干していた。だが、酔った雰囲気はない。反対に、冷凍庫を開けた時に出てくる冷気のような冷静さを醸し出している。

「今まで、本当にお世話になったでござる」

再び、宮本は頭を下げた。

「どうしたの、急に。お世話になったのはこちらだよ。さあ、もっと飲もうよ」

坂本は空になったビールをフローリングにそのまま置くと、更に缶ビールを冷蔵庫に取りに行こうとした。

「お別れでござる」

宮本は二本目のビールも一気に飲み干した。

「実は、体が硬化してきているのでござる」

「硬化？」

「やさしく言えば、石になってきているのでござる」

「石？」

坂本は宮本のビールが空になっているのを見ると、三本目のビールを持って来た。

「これでござる」

宮本は着物を脱いでお腹を見せた。お腹が石のように灰色になっていた。

「またあ、冗談を。自分で絵具でも塗ったんじゃない」

坂本は宮本のお腹に手を伸ばす。ざらざらとした手触り。確かに石だ。ビールを右手で持ったまま、今度は坂本の体が石のように固まった。

「この時代に長く居過ぎたのでござる」

「じゃあ、石に戻ったら、また、僕が水を掛けてあげるよ。そうすれば、元の人間に戻れるじゃないか」

「それは拙者にもわからないでござる。十年後なのか、二十年後なのか、百年後なのか。前は、百年前だったでござる」

「ええ？そんな。百年もかかるの」

宮本は今三十歳。後百年したら、百三十歳。とてもその年齢まで生きられない。と言うことは、宮本とはもう永遠のお別れになるだということだ。

「なんとかならないの？」

坂本はやけ酒のように三本目のビールをあおる。

「なんともならないでござる」

宮本は四本目のビールを飲み干した。

「ビールをもっと飲んだら、人間のままでいられるんじゃないの？」

グッドアイデアを思いついたかのように、坂本が更に冷蔵庫に缶ビールを取りに行く。

「残念ながら、ビールを飲めば、更に、脱水症状で石化が進むだけでござる」

「じゃあ、ビールを飲むのをやめようか」

「どちらにせよ、一緒でござる」

「そう」折角、思いついたアイデアが無駄だとわかり肩を落とす宮本。でも、気を取り直して

「どうせ一緒なら、飲もう。飲もう。明日は休みだ。じゃんじゃん飲もう。今夜は朝まで飲み明かそう。カンパイ」

無理矢理に笑顔を作り、空の缶ビールを片手に、空元気の大声を上げる坂本。

「そうでござるな。飲むでござる」声まで石化したのか、かすれた声の宮本。

二人は冷蔵庫と居間の往復を朝まで繰り返す。フローリングには空の缶ビールが次々と転がっていく。そして、二人は酔い潰れたまま眠ってしまった。

「あーあ。よく寝た」坂本は太陽の光のまぶしさで目が覚めた。

「頭が痛い。ちょっと飲み過ぎたなあ。宮本さん、大丈夫？」

坂本は宮本に声を掛けた。だが、返事はない。

「トイレなの？」やはり、返事はない。坂本はトイレを開け、風呂場を覗いたり、ベランダに出たりした。玄関はカギがかかったままだ。だが、宮本は狭い部屋の中なのにどこにも見当たらず

ない。

「一体、どこへ行ってしまったんだろう」

当惑したまま、床に座り込んだ坂本。ふと、坂本が正座をしていた床を見る。そこにはこぶし大の石が親がめの背中に子がめ、子がめの背中に孫がめが乗っているかのように三つ重なっていた。坂本はその石にゆっくりと近づき、拾い上げる。そして、その石を自分の頭に打ち付ける。

「痛い。やっぱり夢じゃないんだ」

二日酔いの頭痛の上に額のこぶの痛さが重なる。

「宮本さん。宮本さんが人間の姿に戻るまで、これから毎朝、水をやり続けるよ」

坂本は愛しそうに石と自分のこぶを撫でた。